

脚注

1章

25 ページ 指し示しているように思えた——。

将校たちは、ドレフュスを有罪にするために偽の書類を判事に渡し、正義の天秤を恣意的に傾けようとした。だが歴史家は、ドレフュスを逮捕した将校たちが最初から意図的に彼を罠にはめようとしていたとは考えていない。むしろ、ドレフュスの有罪を確信していたからこそ、その有罪を確実にするために汚い手を使うことをいとわなくなったと考察している。

2章

56 ページ 最終的なターゲットにする。

感情的利益と社会的（対人関係上の）利益の区別は、心理学者と進化心理学者による兵士の「守りの思考」をめぐる議論の中心にある。心理学では、願望誘導型思考がもたらす感情的利益は、免疫システムが身体の健康を守るために進化したのと同じように、感情の健康を守るために進化した一種の「心理的免疫システム」であると考えることが多い。この「心理的免疫システム」という考えには、説得力があると思える。だが進化心理学者は、それは意味をなさないと反論する。進化の観点からすれば、人をいい気分にするためだけに正しい思考が犠牲になるということは説明がつかない。ただし、他人に対してよい印象を与えるということには意味があると考えられる。願望誘導型思考によって「自分は強く、忠実で、高い地位にある」だと思込み、そのような印象を異性に与えられるのなら、性交して子孫を残せる可能性が高くなる。ゆえに進化心理学者たちは、社会的利益が得られるからこそ願望誘導型思考が進化したのであり、感情的利益は単なる副産物であると主張している。

第3の可能性もある。それは、兵士の「守りの思考」は進化がもたらした特性ではないというものだ。私たちは、この思考をすることで気分がよくなり、それを行えるからそうしているだけだ、ということだ。「マスターベーションは、それ自体は進化によって生まれたものではない。だが、性欲や手は進化によって生まれた。人間は、この2つを組み合わせる方法を見つけただけだ」というたとえを用いた意見もある。

58 ページ 自問しているのだ。

考えと服のアナロジーについては、ロビン・ハンソンの「Are Beliefs Like Clothes? (考えは服のようなものか?)」(<http://mason.gmu.edu/~rhanson/belieflikeclothes.html>) から着想を得た。

3章

71 ページ 主張している。

カプランはみずからの論文のなかで、人は採用する考えをたくみに操ろうとして、自分の考えの正しさを裏づけるような質問に対しては答えを見つけるための努力をするが、自分の考えの誤りを裏づけるような質問には答えを見つけようとする努力をあまりしないと考察している。これは、兵士の「守りの思考」の原因になり得る——私たちは誰かの意見を耳にしたとき、「この考えをなんとかして受け入れられないだろうか？」というモードに入っていれば詳しく確認することなくそれを受け入れようとする。しかし、自分の間違いを指摘するような意見を受け入れるためには、はるかに多くの努力が必要になる場合があるのだ。

4章

95 ページ 共和党支持者よりも高かったのだ。

この結果が示唆しているのは、リベラルと保守が気候変動について同じ程度に「動機のある推論」をしているというよりも、単に一般的な人々がこの問題について「動機のある推論」をしていることである。

100 ページ 次のようなものだ。

これらの 4 つ質問は、「硬直性」の代表的な 2 つの指標から引用した。1 つ目の質問：Right- Wing Authoritarianism Scale, designed to measure the “authoritarian personality.” 2～4 つ目の質問：Wilson Conservatism Scale, designed to capture “authoritarianism, dogmatism, fascism, and anti- scientific attitude.” G. D. Wilson and J. R. Patterson, “A New Measure of Conservatism,” *British Journal of Social and Clinical Psychology* 7, no. 4 (1968): 264– 69, doi:10.1111/j.2044- 8260.1968.tb00568.x.

5章

132 ページ はっきりと浮き彫りになったように。

バラク・オバマも、大統領時代にアドバイザーに対して、これと似たようなトリックをよく使った。それは相手が“イエスマン”かどうかを試すものだった。誰かが自分の意見に同意したとき、オバマは自分の考えが変わったふうを装った。そして「なぜそれが真実だと思うのか」を相手に説明させるのだ。

「どのリーダーにも長所と短所がある。私の長所は相手が表面的に自分の意見に合わせようとするのを見破れることだった」とオバマは語っている。

139 ページ 明確になる。

現状維持バイアステストが完全にクリーンな思考実験ではないことに気づいた人もいるだろう。現状を逆にするためには、現状を逆にするための労力（現状を変えるときにかかる時間、お金、精神的なエネルギーなど）——すなわち「取引コスト」のことも考慮に入れなければならないからだ。しかしこれはあくまでも思考実験なので、取引コストがゼロであるという架空の設定を装うことができる。

140 ページ 「ノー」だった。

このようにイギリスがEUに加盟していないという架空の設定を用いる場合でも、（1）最初からEUに加盟していない場合、（2）一度加盟した後で脱退した場合で違いがある。この現状維持バイアステストにおけるもう1つの対比だ。どちらの場合も、視点を変えることで自分の意見を確認できるのなら有効だ。

6章

166 ページ （ボールベット）」になる。

公平を期すために、ボールベットの場合も、自動運転車の賭けと同じように、賭けに買った場合にもらえる賞金は1年後に与えられるという前提にする。

これによって、「早く利益を得られる可能性」によって判断が左右されなくなる。

7章

195 ページ 要約できるのである。

平均的な人たちがみずからを他人より優れていると思っているなら、それは少なくとも一部の人が自己欺瞞を行っているという証拠になるだろう。現実的に考えて、あらゆる人が自分を平均以上の人間だと思っている（「レイク・ウォビゴン効果」と呼ばれる）わけではない。しかし、自分は他人よりも優れていると思っている人の多く、おそらくはほとんどの人が、現実に他人よりも優れていて、それを正しく認識しているとも考えられる。そのような人たちがいるからこそ、研究で自尊心が高い人は自己評価が高いという結果が出たのだと推測できる。

197 ページ 分類されてしまう。

この「自己欺瞞質問票」の出典元は以下のとおり。R. C. Gur and H. A. Sackeim, “Self-deception: A Concept in Search of a Phenomenon,” *Journal of Personality and Social Psychology* 37 (1979): 147- 69. これは『The Elephant in the Brain』（Robin Hanson、

Kevin Simler 著、未邦訳) などの人気の書籍や Radiolab などの人気のポッドキャストで自己欺瞞の効果を示す証拠としてよく引用されている。

8章

203 ページ ヘンリー・フォードの言葉。

このフォードの言葉が初めて引用されたのは 1947 年の『リーダーズダイジェスト』誌だと思われるが、掲載時には引用元は明記されていなかった。(The Reader's Digest, September 1947, 64; via Garson O' Toole, "Whether You Believe You Can Do a Thing or Not, You Are Right," Quote Investigator, February 3, 2015, <https://quoteinvestigator.com/2015/02/03/you-can/>).

212 ページ 使うのだろう？

ブロードスキーはその前から、ファックスの成長を脅威に感じていたと思われる。以下によれば、数年前からファックスの販売台数は毎年倍増していたからだ。M. David Stone, "PC to Paper: Fax Grows Up," PC Magazine, April 11, 1989.

10章

267 ページ リベラル票を奪わなかったら

もちろん、6 章で見たように、高精度の予測ができる人でも、自信を持っていたのに間違えることがある。人は基本的に自信過剰で、自分が思っている以上に間違っていることが多い。

269 ページ 見られなかった。

ここで用いられる誤差の尺度は「ブライアスコア」である。超予測者のブライアーの年間スコアの傾き (大会 2 年目と 3 年目の平均) は -0.26、通常の予測者は 0.00 だった (In Mellers et al., "Identifying and Cultivating Superforecasters as a Method of Improving Probabilistic Predictions," Perspectives on Psychological Science 10, no. 3 [2015]: 270, table 1, doi:10.1177/1745691615577794.)。Mellers らはブライアスコアを次のように定義している。"The sum of squared deviations between forecasts and reality (in which reality is coded as 1 for the event and 0 otherwise), ranging from 0 (best) to 2 (worst). Suppose a question has two possible outcomes, and a forecaster predicted a probability of 0.75 for the outcome that did occur and 0.25 for the one that did not. The Brier score would be $(1 - 0.75)^2 + (0 - 0.25)^2 = 0.125$." ("Identifying and Cultivating Superforecasters," 269.)